

2024 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	総合科学部国際共創学科 1 年
------------	-----------------

（１）START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

私は START プログラムを通して多くの人と出会い様々な経験を積むとともに、Diversity と Inclusion のテーマに関する学びを深めることができました。

インドネシアで特に印象に残っているのは、2/18(水)に受けた “Inclusive and Diversity in Education” というタイトルの講義です。この講義では参加者が「盲目の人」「手が使えない人」「喋れない人」「健常者」の役割に分かれてパズルを解くゲームをしました。始めに同じ役割の人同士でグループを組んだときは、健常者や喋れないグループが難なくパズルをクリアし、盲目や手が使えないグループは何もできないようでした。しかし、最後にいろんな役割の人が混ざってグループを組んだ時は、どのグループもメンバーみんなが活躍できるように話し合い、様々な工夫を凝らしていました。このように、自然と会話が生まれ、笑顔が増えている様子を見て、私は diversity や inclusive の考えが社会の全体幸福のために重要であることに気づきました。これまでは、diversity も inclusion も障がい者や LGBTQ などマイノリティの人々のための概念だと考えていましたが、実際には社会の構成員一人ひとりに新たな視点をもたらしてくれるものだということ学びました。

タイで印象に残っているのはカセサート大学附属特別支援学校への訪問です。先生方のお話によると、この学校には障がい児向けのクラスと一般クラスがあり、何人かの生徒は成長と共に障がいクラスから一般クラスに移ることができるそうです。学校としても、障がいを持つ生徒が自立できるように、自己開発やコミュニケーション能力の向上、社会的態度を身に着けることを目的とした授業を提供されていました。私は今まで特別支援学校とは障がい者のできないことをもっぱら手助けするための学校だと考えていましたが、実際にはむしろ障がい者の自立と社会参加を支援するものだということに気づきました。

また、2 週間全体を振り返ると、現地の人々や学生スタッフの皆さんのエネルギーを受け、私自身も日本にいるときより笑顔が増えていたように思います。特に UPI の学生スタッフの多くは e-START を一緒に受講していたため、ついに対面で会えた喜びがとても大きかったです。次々と出てくる食事や終わらない写真撮影タイム、賑やかすぎるバス移動などなど、様々な場面で Campus Asia チームの一体感を感じられて幸せでした。同時

に、一緒に START に参加した広大の学生からも大きな影響を受けました。今回は私も含め多くの人が初海外だったため、日本とは異なる文化への驚きを新鮮な気持ちで共有できました。また、誰もがこの貴重な経験を最大限自分のものにできるように、積極的に発言・質問したり、たくさん写真を撮ったり、夜に出かけたりしていたのも印象的でした。みんなの姿を見ていると、普段は一步引いてしまう場面でも「せっかくだから」という気持ちになって、色んなことに挑戦することができました。インドネシアでダンスを踊ったことも、タイで派手な伝統衣装を着たことも、日本でなら私は恥ずかしくてできなかったと思います。ひとり一人を受け入れてくれるチームの雰囲気や、「一緒にやろうよ！」という仲間からの声掛け、そして常夏のタイ・インドネシアのエネルギーが私の背中を押してくれました。

私は今年の 10 月から半年間、ドイツに留学する予定です。START プログラムとは違って長期間かつ一人での留学になりますが、この 2 週間で学んだ「今この瞬間を楽しむ」姿勢を忘れずに過ごしたいです。実りのある留学生活となるよう、自分から動くことを目標に今から頑張っていきたいと思います。また、普段から助け合いの気持ちを持つことを大切にしたいです。私が START プログラムを通して学んだ考え方のひとつに “everyone has a disability” があります。自分の嫌いなところを過度に責めず、周りの人たちに支えてもらいながら、私自身も誰かの役に立つことを目標にして過ごしていきたいです。

（2）プログラム内容についての全体的な感想

インドネシアとタイの 2 か国を訪問したことで、イスラム教国インドネシアと仏教国タイの文化を比較しながら学ぶことができてよかったです。また、同じ国の中でもジャカルタとバンドン、シーラーチャーとバンコクという異なる都市を訪れたことで、地域による様々な違いを感じました。日本では格差はあまり目に見えないけれど、インドネシアやタイでは貧困層の存在が街並みから感じ取られたのが印象的でした。

移動が多くて大変な部分もありましたが、行く先々で多くの人との出会いがあり毎日が新鮮でした。講義とフィールドワークのバランスが良く、毎日全く違う体験を楽しむことができました。楽器を演奏したり、民族衣装を着たり、ナシゴレンを作ったりと、タイ・インドネシアの様々な伝統を実際に体験できたことが良い思い出になりました。夜の自由時間もコミッティーの皆さんにいろいろな所に連れて行っていただいて、本当に感謝しています。

「ダイバーシティとインクルージョン」というテーマは非常に幅が広く、宗教、ジェンダー、その他様々な観点でフィールドワークができてよかったです。参加者の興味も幅広く、全く異なる学部・学科から集まっていたので、グループワークはもちろん休憩時間の

交流なども全て貴重な学びの場になりました。

（３）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

e-START で交流した学生と現地で会える場合が多いので、e-START を優先的に受講すると良いです。画面をオンにして参加すると、相手に顔を覚えてもらいやすいです。また、事前に渡航先の国や訪れる施設などについて調べておくのがおすすめです。特に訪問先の歴史的背景が分かると学びが深まるし、現地で質問もしやすくなります。現地の言葉で挨拶や感謝、自己紹介などができるようになっておくと、相手との距離を縮めやすいです。英語でも、海外の人に覚えてもらいやすいニックネームや印象に残る自己紹介を考えておくといいです。

持ち物についてですが、薬はたくさん持っていくべきです。特に東南アジアに行く人は腹薬を 2 週間分持っていくことをお勧めします。暑い地域に渡航する人は着替えをしっかりと持って行き、洗濯もできるようにしておくといいです。自分で昼食や夕食を用意しなければならない日もあるので、みそ汁などを持って行っておくといざという時に役立ちます。日本からお土産を持って行っておくと、最後に感謝の気持ちを伝えるのにとっても良いです。和柄のお手紙は手書きで心のこもったプレゼントになるのでおすすめです。スーツケースは迷ったら大きめのほうが安心だと思います。私は羽田でスーツケースが壊れるハプニングがあったので、事前に点検をしておくべきです。

渡航先では、自分から他の学生や先生方に声をかけていくことで仲が深まります。みなさんとても優しくコミュニケーションを取ってくださるので、英語が不安な方も心配する必要はありません。毎日朝の集合が早いので、夜更かしせずによく寝ることが大切です。夜の自由時間にみんなで出かける場合も多く、あまりホテルでの時間が取れないため、最終プレゼンテーションの準備は隙間時間に計画的に進めるといいます。

2024 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	教育学部第三類国語文科系コース
------------	-----------------

（１）START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

今回 START プログラムで学んだことはコミュニケーションの在り方、つまり他者へのかかわり方だ。私は START に臨む前段階で、近年インドネシアやタイを含めた東南アジアの地域から主に労働者として来日する外国の方々が増加しており、教員になるうえで、将来、そのような方々の子息と関わる機会もあるかもしれないと思い、そのような異文化に興味があったため、今回のプログラムに臨んだ。

まず、実際にインドネシアに渡航してみて驚いたことは、宗教に関する捉え方だ。インドネシアは、イスラム教徒が約 9 割と多数を占めながらも、カトリックやプロテスタント、ヒンドゥー教、仏教など様々な宗教が混在しており、宗教の違いがある中でも、互いに共存していることを知った。今回のプログラムでも、UPI のイスラム教徒の学生が私たちと一緒に実際にカトリック教会を訪れ説明を聞いている光景や、異教徒と普通に会話を交わしているのを目の当たりにした。以前、イスラム教は一神教で、他の神の存在を認めない、ということを知っていたことがあるため、多宗教と共存することは不可能であると考えていた。しかし、インドネシアでは、様々な宗教が混在する中で、お互いに信仰する宗教は違えど、平和やよりよい生活を望むために信仰しているという点は同じであり、考え方を押し付けたり、差別したりすることによって争うのではなく、それぞれ立場があるということを認識し、互いを尊重しながら社会を形成していこうという理念を採用していることを学んだ。また、日本と違ってほぼ全国民が何らかの宗教を信仰しており、身分証にも信仰する宗教が記載されるほど、インドネシアでは宗教が身近であるように思われた。そして実際に教会や寺院、モスクを訪れてお話を聞く限り、「イスラム教」や「カトリック」などといった分類がされていても、必ずしも様式が固定なわけではなく、時代の変遷や歴史の反省によって漸次的に様式や捉え方が変化し、地域に根差した文化や習慣として宗教が受け入れられていることを学んだ。例えば、訪れたプロテスタント教会では、カトリック教会のような伝統的な建築様式ではなく、近代的な建築様式であるうえ、パイプオルガンなどの楽器ではなく、シンセサイザーキーボードやドラムなどの近代楽器を用い、スダダ地方の民族音楽を奏でるなど、既存イメージのプロテスタントとは異なった。そして、インドネシアでは、地域によって人々が信仰している宗教の割合が異なっており、婚姻関係を結ぶ際に改宗するといった例もあるなど、人々の間での信仰心も差異があり、信仰が必ずしも厳格に行われているわけではないことを聞いて、様々な信仰の在り方があることに驚いた。私は自分の宗教観について考えたことがなかった。家族が特定

の宗教を信仰していないうえ、地下鉄サリン事件や高額のお布施による家計破綻、イスラム過激派によるテロなどのニュースを目にすることが多く、宗教について知らなくても別に構わないと考えていた。しかし、今回の研修を通じて、宗教全般を忌避する必要はないのではと思った。宗教には広い意味でなにか生活習慣として、人々の感覚に根差している側面もあるのではないかと感じた。私も特定の宗教を信仰していないとは言えど、習慣として当たり前のように元旦には神社に参拝し、ひしゃくで手を清め、お賽銭をいれて、一年の平穏を祈願したり、数年に一度祈祷を受けたりしている。また、様々な書物に触れる中で、その中のことばに支えられることもある。あくまで個人的な考えではあるが、これも広い意味で宗教の枠組みでとらえることができるのではないか、と思われた。人それぞれ異なる認識体系があり、価値観も異なるということを学ぶことができた。

また、教育に関して、現場での教育実践を観察したり、実際に学校で児童に触れあったり、先生方のお話を聞いたりすることができたのは、貴重な経験になった。インドネシアでは、実際にイスラムスクールを訪れた。自分は教育学部の国語文化系コースに所属しているため、学校でどのような言語教育が行われているかに特に関心があった。インドネシア語や英語のほかに、地方の言語であるスダ語が教科書を用いて指導されていることに驚いた。また、イスラムスクールということもあり、40%の時間がコーラン学ぶなどのイスラム関係の学習の時間に充てられていることも特徴的だった。コーランの読解のために、アラビア語も並行して学習していて、語学に関しては学習内容が多岐にわたっていてとても大変そうに感じられた。同行していただいたある UPI の方によると、コーランの全内容に関してはさすがに事細かく覚えることはできないし、アラビア語もとても難解で、マスターする領域には届かないとおっしゃっていた。大学受験の科目にコーランに関する選択科目があるそうで、非ムスリムはその他の科目を選択できるそうだが、非ムスリムであっても、多少のコーランの知識は試験で試されるそう。日本で日本史や古典が扱われるように、コーランが学習科目の一部としても扱われているのだと思われた。

それから、早朝 7 時からの授業、食前、食後の合唱や入室時での挨拶、決まった時間での礼拝など、私が育照られてきた文化とは異なるものがあって戸惑うこともあったが、自分が分からないものに関しては、尋ねるとどなたも丁寧に話していただいた。それぞれの行為をどのような意味として受け取るかは、文化を共有する社会集団によって決められるため、無礼がないように、分からないことは事前に調べるだけでなく聞く、もし何か失礼なことをしていたのに気づいたら謝る、という姿勢が他者の尊重につながるのではないかと感じた。しかし、子供の様子に関しては、眠そうな子や恥ずかしがる子、はしゃぐ子、校庭でボール遊びなどをしている子供たちの様子を観察して、なにか普遍的なものがあるのではないかと思った。

また、タイでは、企業訪問や特別支援学校や、障がい者支援団体を訪れ、代表者の方や、

現場の方々からお話を聞いたり、実際に観察したりした。どの団体においても共通して言えることは、**Equity** の実現、つまり、個々人が自分の持っている能力を生かせるような環境づくりを行い、自己実現の欲求が満たせるような機会を用意し、個別に応じた支援を行っていたということだ。例えば、ミシュランの工場に勤められているある方は、自分のバイクを買うといった目標のために仕事を頑張っているそうだ。その方は耳が不自由で、手話がコミュニケーションの手段である。同僚が手話の通訳をしていた。ミシュランの会社では、手話の研修を行っているそうだ。手話話者とそうでない人をつなぐ人がおり、相互の働きかけがあれば、その人が障がい者であるとはもはやいえないのではないか。私もインドネシアやタイで現地語が話せないというある種の障害の中、現地の学生に付き添ってもらい通訳をしてもらったおかげで、そこまで不便を感じることはなかった。今回の渡航を通して、障害とは何か個人が背負っているものではなく、周囲の働きかけによって解消されるべきものであり、それが改善できていない状態を指すように思われた。

また、全員が質の高い教育、公正な教育を受けられるように、出資を行っている団体である、**Equitable Education Fund** をおとずれた。特に印象に残ったのは教員養成のために出資をしている点である。農村や、島部、山岳地帯、国境地帯などの僻地における教員不足の解消のために、奨学金制度を設けて、僻地出身の人が僻地の教員となって、その地域のリーダーになることを推進しているそうだ。日本でも島しょ部や山村部など、過疎化が進んでいる校区があるが、タイの場合は、そのうえ、一部の地域では標準語と地域の使用言語との間の相互理解可能性がないといった言語教育の課題があるそうだ。また、次に印象に残ったのは、タイでは中学校卒業後の進路は、普通科高校よりも職業教育が行われている高校が多いといった日本との違いだ。国や地域によって教育の内容や形態には差異が見られるものの、あいまいな言い方ではあるが、社会を形成する人を育成する、という観点では同一であるのではないかと思われた。私も将来教員になろうと考えているが、今回の訪問を通して、大学で学んだあと、地元の地域の教育に携わり、地域課題、例えば、多国籍化が見られる学級の言語教育の再構築などの解決に寄与できるような教員になりたい。

そして、渡航前は、日本とインドネシア、日本とタイのようにいわば国と国の違いは何かを実際に体験し、知識を蓄えることを目的にしていた。しかし、渡航をしているさなかで、ただ単に国と国という大きな違いは何かに着目するというよりも、まずは異なる背景を持つ一人の人間として相互に実際にコミュニケーションをとり続ける態度、そして、あいまいないい方にはなるが、相手を思いやる態度そのものが重要であると感じられた。これは研修を共にした現地の学生や広大の学生、そして先生がた、現地の方々から学んだことである。渡航前、私は少しだけ現地のことを学習したがあまり覚えることができなかった。よって、現地についてから細かい文法事項や数字の呼び方を覚えようとしていたが、広大の仲間に、「細かい数字は英語でも通じるやろうから、気持ちを伝えるフレーズ

を覚えるほうがええかもな」と言われた。この時気付いたのは、言語についての知識がどれだけあるかということよりも先に、何を伝えたいか、何を知りたいかという、手段ではなく内容が重要であるということだ。表情、ジェスチャーなどを総動員して、相手に伝えようとする態度、相手に体を向けて聞く態度や、質問する内容など、勉強になる部分がたくさんあった。また、現地の学生は、私たちのことを積極的に知ろうとしてくれた。「ありがとう」「おつかれ」「こんにちは」など、知っている少しの日本語を話してくれた時、なぜかうれしく感じた。また、自分の拙い英語による会話の際も、真剣に聞いて、意図をくみ取ってくれた。そして、感謝を伝えると、笑顔で返してくれたり、バスの乗降の際、「頭上にきをつけて」と気を使ってくれたり、エレベーターを譲ってくれたり、日常の些細な気遣いは、使用言語関係なく、相手に伝わるものなのだということが分かった。

また、UPI のインクルーシブ教育の講義で、各々がアイマスクをつけたり、しゃべることができないといった制限のなか、仲間と協力して実際にパズルを完成させるというゲームでは、自分がいかに周りを見て行動できていないかを実感することができた。自分が”Typical person”のターンで、目が見えない人がパズルを探すのを手伝う際、その人の頭を椅子にぶつけてしまうという失態を犯した。他者への気遣いや思いやりはただアタマで考えるものではなく、実際の場でいかしてなんぼである。今まで内ばかりに向いていた意識をちょっとだけでも周りに向け、想像力を働かせ、日々の行動を反省し改善していきたいと思う。また、このゲームでは、得手不得手など個々人によって異なる様々な人々が協力して社会を築いていくあり方を考えることができた。最初、手が使えないひとでグループになってパズルをしたが、完成できないもどかしさを感じた。最後に全員が協同してパズルを完成させる際は、お互いに役割を持たせて、みんなで完成させた、という達成感を感じることができた。自分ひとりでできないことを、自分ができるところを生かして、全員でお互いに協力するということが、誰しもが社会の一員であると感じることにつながるのではないかと思った。

また、今回の研修では自分の大きな課題を見つけることができた。それは、相手に伝える、相手を聞く姿勢に対してこれまで無頓着であったということだ。伝えることに関しては、例えば、訪れたカトリックの教会で感想を聞かれた際、うまく答えられなかったことや、プレゼンの最終発表の際では、原稿を頼ってばかりだったことなどがあげられる。今まで読むことに関しては関心があったが、対面で話すことを中心とした伝えるということに関しては、あまり関心がなかった。しかし、今回のようなもどかしい経験を踏まえ、ジェスチャーや表情、間の取り方等々も含め、伝えるということに関して、これまでより分析的になり、実践を重ねる中で鍛えていきたい。

そして、聞くことに関しては、現地の学生の方を中心として学ぶことができた。それは目の前の相手が伝えたいことを何とか理解しようとする姿勢だ。自分が口下手で英語もあり上手でないにも関わらず、顔を見て一生懸命意図をくみ取ろうとしてくれたり、分か

らないことは聞き返してくれたりした。今回のように、初対面の人と慣れない言語を媒介としてコミュニケーションをとることで、伝えるとはなにか、聞くとは何か、話すとは何かについて考えることができた。これから人と関わるにあたって、まして教員として生徒や先生方と関わるにあたっては、これらに習熟していなければならないと思われた。

今回の渡航から、実際に自分の目で確かめ、疑問を持ったり、コミュニケーションをとったりことの重要性を深く自覚することができた。歴史の教科書やテレビやニュースなどのメディアを通じて情報を得ることは、確かに手軽で便利ではあるものの、語り手という第三者を介した情報であるため、どうしても視点が偏ってしまう。今まで私の中にあった、インドネシアやタイのイメージがすべてではないことがよく分かった。バンドンの町では、最新の日本車やドイツ車が走っていたことや、「ドラえもん」や「クレヨンしんちゃん」が訪れた学校のほとんどの児童に知られていたこと、「呪術廻線」がカフェのコラボグッズになるほど、最新の漫画が人気であったこと、インスタントかけうどんが地元のコンビニで売られていたこと、それから、ヒジャブは、とある現地のムスリムの学生によれば自分を表現する大切なものだそうで、どこか誇らしげであり、時々女性抑圧の象徴のように語られるヒジャブのイメージとは乖離していたことなど、様々なことに驚かされた。今回のプログラムのように、実際に渡航をして自分の目で見たり、人々からお話を聞いたり、自分で質問したりをするといったコミュニケーションを通して、国や地域、宗教といった一般化されたイメージに自ら疑問を持ち続けることが重要であると感じた。もちろん、今回の渡航で経験したものから、インドネシア、タイとはどういうものか、や〇〇教とはどういうものかということをやや安易に一般化し、不変で完全なものとしてとらえることも適当ではない。

今回の研修を終えて私の考える異文化理解とは、何か書物などを読んで得られる知識だけでなされるのではなく、実際にコミュニケーションをすることを通じて、他者を知ろうとする態度によってなされるという概念である。また、異文化とは、国や地域といった大きな枠組みだけでなく、自己と他者の関係性そのものを指しているのではないか。俗にいう日本人はアニメが好きとか、寿司やラーメンをよく食べるとかいうのは一般化されたイメージである。一般的な傾向はみられるとしても、程度はひとそれぞれによって異なる。まずは、どんな場面でも、目の前の他者や物に関心を持ち、分からないことは聞く、調べるなどといった広い意味で「対話」することが重要であると考えます。

また、将来、私は中学校、高校の国語科教師として働こうと考えている。

今回の渡航は、まだまだ自分の言語感覚が未熟であることを自覚するきっかけになったと同時に、コミュニケーションのツールとしての言語の在り方について考えるきっかけにもなった。今までは、文章をいかにして読むかを生徒自身が客観視できるような授業づ

くりに興味があったが、今では、そのうえ言語の分類に関わらず、話す、聞くことも含めた、コミュニケーションをとる能力の伸張が、国語の授業でどのように行われているかについても興味を持つようになった。また、国語教育ではなく、日本語教育に関して、近年日本語を母語としない労働者の数が増加しているうえで、彼らに日本語を事細かく教える、日本語の上達を強いることが、共生社会を築き上げる上での最重要課題ではないと思われた。日本語指導を放置するわけでもなく、信頼関係を築き、互いに歩みよることができるような環境づくりが大切なのではないかと考える。例えば、今回の研修での体験のように、感謝や挨拶を表す言葉などお互いの言語の簡単な語彙を学びあうことから始め、地域で食事会を催したり、スポーツレクリエーション大会やカラオケ大会などを通じることで、言語やもとの文化的背景は違えど、同じコミュニティを形成する一員であると感じることは可能なのではないかと考える。

最後に、今回の研修はとても刺激的だった。2 週間の研修期間でたくさんの温かい人々に出会い、充実した楽しい思い出をつくることができた。新たなご縁を今後も大事にして生きたい。それと同時に、自分には至らない点がたくさんあることに気付くことができた。研修中感じた悔しい思いは今後の学びの糧にしていきたい。

（2）プログラム内容についての全体的な感想

14 日間の研修を通して、現地の学校に訪問したり、施設に訪問してお話を伺ったり、また、実際に現地の人々との密な交流をしたりするなど、個人旅行では経験しがたいことを経験することができた。本研修への参加で得られたものは今後の人生の財産になった。お忙しいなか、我々を引率し、献身的にサポートしていただいた、教職員の方々、並びに、貴重な資金をご援助いただいた広島大学、日本学生支援機構の関係者皆様、また、本研修の企画、運営に携わられた、国内外のすべての方々にも心より感謝申し上げますとともに、研修参加の承諾、資金の援助、準備を手伝ってくれた両親や祖父母に深く感謝したい。

（3）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

持ち物に関して、個人的にこれくらい持って行った方がよかったな、と感じたものを以下簡潔に書きます。

携帯用爪切り、男子だと髭剃りは、安価な物でも持って行った方がいいと思います。髭剃りはホテルの部屋に常備されていなかったです。

お土産は少し多めに持って行った方がいいかもしれません。お世話になった先生方や学生の方々全員に渡す場合、30 セットほどはあった方がよいかと思われました。今回インドネシアでは、計 20 人弱、タイでは計 10 人ぐらい、お世話になった方々に渡す機会がありました。ちなみに私は、ハイチュウと森永ミルクキャラメルの個包装一袋ずつと、葛飾北斎の日本画が書かれたクリアファイルを 20 枚ほど持っていました。

ポケットティッシュは 10 セットほどは持っていった方がいいと思われました。行く先々のトイレでは、トイレットペーパーがない場所もちらほら。

今回の渡航では、水は現地のいたるところでミネラルウォーターを親切に準備してくださっていたので、自分で買いためておく必要はないように思われました。

下着、靴下に関しては、できれば 10 日以上は持って行った方がいいと思います。毎日洗濯機で洗濯することはできません。ホテルのバスルームで手洗いをすることもできますが、ホテルの自室に戻る時間が午後 10 時を回ることも多かったため、毎日手洗いする気力は個人的にはありませんでした。

最後に、現地に行ってみて初めて気づいたことは本当に多かったですし、国内外の温かい人々に出会えて、この START プログラムに参加して本当に良かったと思いました。ぜひ、自らの目を見て、自ら聞いて、たくさんのことを感じてください！